

B01a 太陽系天体におけるアマチュアとプロの連携

渡部 潤一 (国立天文台)

太陽系天体は時間変化する現象が多く、アマチュア天文家の寄与が昔から大きい。惑星面の精緻な観測では、古くはスケッチ観測、最近ではビデオ等による撮像観測が継続的に行われ、火星の砂嵐などの突発的な現象の早期発見に寄与している。また新彗星や小惑星においては、日本のアマチュアの発見は世界的にも多く、その中には新種とおぼしきものも散見され、多様性を探る上でのサンプル増加に欠かせない。最近でこそアマチュアの発見の数は減りつつあるが、位置観測や測光観測においては、いまだに重要な役割を果たしている。さらに、地域限定のタイムクリティカルな現象においても、古くは月による恒星の掩蔽、最近では小惑星による恒星食などで、多くのアマチュアがその地域にいるメリットを生かして貴重な観測に寄与している。流星群などでは、アマチュア主体のキャンペーンによって、前代未聞の膨大なデータが得られ、知の蓄積を残しつつある。そんな中、CCD撮像素子の普及によって、これまで以上にアマチュアの活躍の場が広がりつつあり、プロとの連携は多様になりつつある。

本講演では、これら太陽系内天体の観測におけるアマチュア天文家と研究者の連携の現状と今後の展望について概観する。